(139) 栃木県宇都宮市北端近傍の東昭鉱山と星教鉱山

・ 栃木県宇都宮市の北端近傍に、銅鉱石などを産出した富井鉱山があった。この鉱山跡については本探査記で既報である。現地は閉山後、他の目的に使用された後、現在では、「原野」の如くになっている。富井鉱山に関する資料(1)中に掲載されていた地質図中に、富井鉱山の名の他に、「東昭鉱山」と「星教鉱山」の名が記されていたが、本文中に何らの説明も無かったので、余り気にかけていなかった。富井鉱山と比較すると規模の小さな鉱山であったのであろう。が、最近になって入手した参考文献(2)を読んでみると、若干ながら、両鉱山についての説明があった。富井鉱山と鉱山地質については同じとのこと。それならば、これらの鉱山跡でも銅鉱石などの標本を採集できるのではなかろうかと考え、探査に出かけた。その結果、共に、現地で坑口跡、ズリ跡を確認できた。めぼしい標本は採集できなかったが。両鉱山は近傍にあり、半日でもあれば両鉱山を訪問できるので、まとめて報告することにした。

まず、著者の行った資料を用いての、現地の確認の方法を述べよう。参考文献(2)に掲載されていた富井鉱山近傍の地質図を参考資料として、後掲している。それと、現在の地形図である図1を対比し、三角測量の方法で、現地の大凡の当たりを付ける。その際、Google Earthe を対比し、三角測量の方法で、現地の大凡の当たりを付ける。その際、Google Earthe を対比し、三角測量の方法で、現地の大凡の当たりを付ける。その際、Google Earthe を対比しなる場合もある。ただ、名の知られた鉱山ならば、参考文献(1)でわかるように、その鉱山近傍の地質図が掲載されてはいる。が、圧倒的鉱山には地質図は添付されることはなく、大凡の位置が記述されているだけである。「何々駅から北に約何km」等。これでは探査は難しい。現地への道がしっかり残っており、遠方より現地が望めるならば、どうにかなりそうであるが。地元の人さえ、かってあった地元の鉱山について記憶が薄れている場合が多い。「ああ、あの山のどこかにあったと聞いている」等々。

現地への経路は次の通りである。星教鉱山も東昭鉱山も富井鉱山に近い。従って、鹿沼市の方から車で向かうならば、富井鉱山を目指して進む。富井鉱山への経路は、本鉱山探査記中の「富井鉱山」の項で説明している。富井鉱山を右手に見て、77号(舟生街道)を北に進んでいく。62号にぶつかったら、右折し、東に進んでいく。大凡2.5km進んだ当たりで、右折をし、62号を離れ、少し細い「村道」に入り、南下していく。大凡500m進んだ当たりが、星教鉱山への入口である。道路の右側山中に鉱山跡がある。なを、この付近には採石場であったらしい険しいガレ場を持った平地がある。平地には建物などがあり「現業中」と思われる。ここは「星教鉱山」跡ではないと判断した。留意しておくこと。車は邪魔にならないように、場所を見つけて駐車しよう。これより先の経路は後掲している写真と、その説明文で行っている。

一方、東昭鉱山へ行くには、右折せず、62号をそのまま進んでいく。道路はゆっくりと南に向かって進むようになる。直に、左手に、老人ホームが見える。東昭鉱山の入口は、この少し先の右手である。ここでも、車は邪魔にならないように、場所を見つけて駐車しよう。同じく、これより先の経路は後掲している写真とその説明文で行っている。

1日じっくりと時間がとれ、昼の長い時期ならば、近場にある富井鉱山跡や、関白鉱山も訪問できよう。ついでながら、帰路途中には、大谷石(凝灰岩)の採掘跡には、大谷石の博物館がある。採掘跡は、地下に巨大な空間を形成し、地下観光ルートになっている。立ち寄ってみるのもよい。ている。

2015年 3月探査

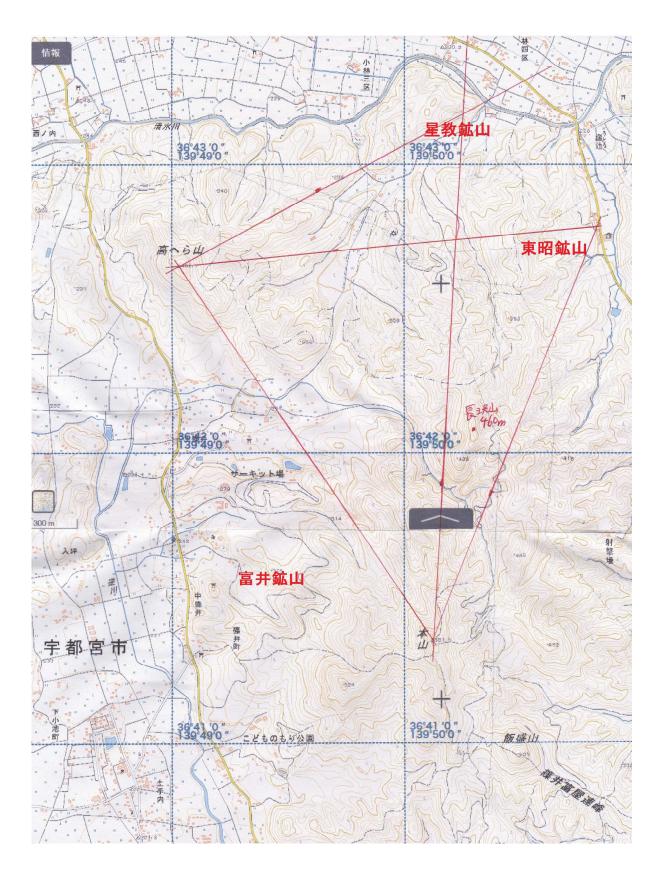


図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。後掲している参考資料中に描いた三角形を、高へら山と本山を基底とし、相似形で書き写す。引いた 2 本の線分の交点近傍が「鉱山跡」らしいと予想できる。その頂点であるとは確かではないが、その付近であることは確かであろう。現地に入って歩き回るしかない。良いハイキング、トレッキングも体験できる。資料を用いた鉱山跡探査の 1 方法である。

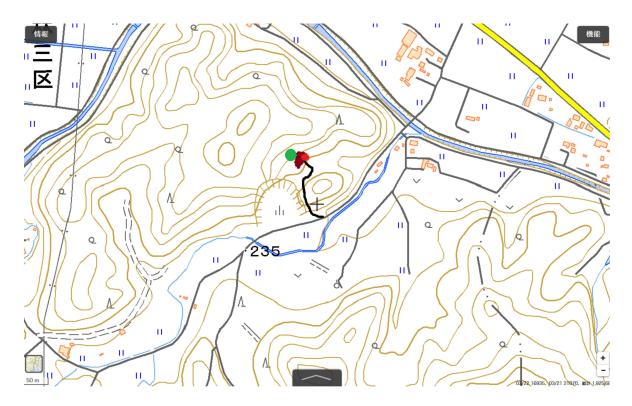


図2 図1の部分拡大図。星教鉱山跡へ。村道から黒線で僅かに生き残っている林道を書き足している。黄緑丸が坑口跡。茶色はズリらしい跡。赤丸は鉱山跡を物語っている石碑。歩いて10分程か。近傍にガレ場記号がある。この場所は、かっての採石場と思われる。が、確認は取れていない。このガレ場は<math>Google Earthで視認できる。

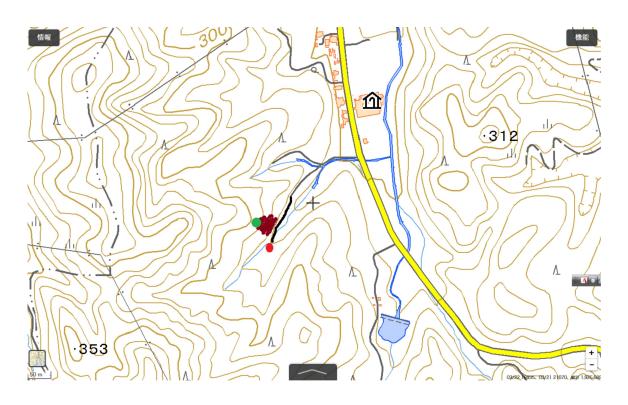
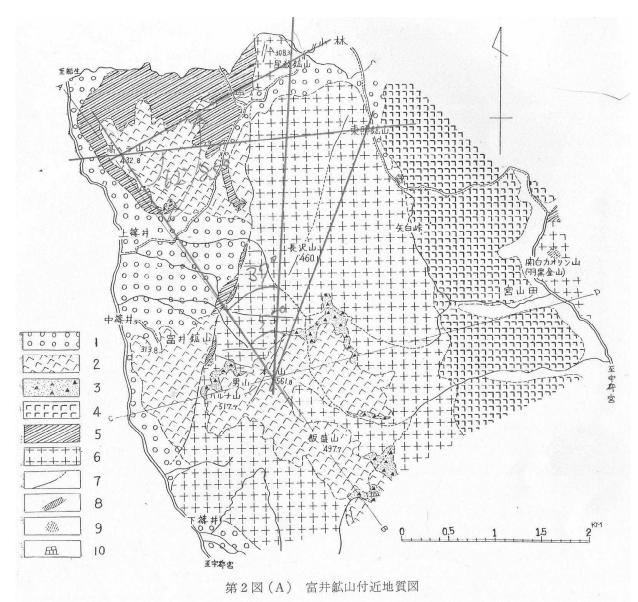


図3 図1の部分拡大図。東昭鉱山跡へ。黒線で林道を書き足している。赤丸が朽ちた小屋。 黄緑丸が坑口跡。茶色がズリ跡。歩いて20分程か。



1. 関東ローム, 2. 石英粗面岩, 3. 熔結凝灰岩・角礫凝灰岩・火山礫岩, 4. 輝石安山岩および 同集塊岩, 5. 角礫凝灰岩・凝灰岩・砂岩および頁岩互層, 6. 石英斑岩, 7. 鉱脈または断層, 8. 鉱化帯, 9. カオリン化帯, 10. 採石場

参考資料 参考文献(2)より複写掲載。なを、参考文献(1)には、これと酷似した地質図が掲載されている。両文献の公表年からすると、参考文献(1)が参考文献(2)中の地質図を借用したと思われる。「本山」と「高へら山」を基底として各々星教鉱山と東昭鉱山跡らしい所を頂点とした三角形を作る。各々2つの内角を分度器で測定する。図1中に、得られた三角形の相似三角形を描く。

鉱山跡写真 東昭鉱山



写真1 62号に架かっている左の橋の欄干には「上金山沢」の銘が記されている。この沢の先に鉱山跡がありそうな銘である。現地へは正面の林道を進み、少し先にある分岐点を左に進んでいく。



写真 2 進んできた林道の左側の沢にあった「宝の川」の銘のついた砂防ダム。やはり「宝」がありそうである。



写真3 「宝の川」砂防ダムの少し 先にあった、ほぼ完全に朽ちた小屋。鉱 山関係の施設だったのかもしれない。写 真を撮っている所の右側斜面にズリ跡ら しい物がある。次の写真。



写真4 正面はズリ跡らしい。殆ど 石英斑岩。これを登り上がった先に坑口 があった。次の写真。



写真5 右側に、掘り開いたらしい[人工的」な細い沢があり、沢底が黒っぽい。鉱山廃液らしい。その先写真中央に坑口がある。枯れ草木に埋もれて、遠くからでは坑口は全く見えていないが。先へ進んでいく。



写真6 坑口である。



写真7 入口から見た坑内の様子。水が溜まっている。入口付近に崩れて積み重なっている土砂を取り除けば、排水されそうである。

星教鉱山



写真8 鉱山跡への入口。入って、数 十m先で、右手にある山道に入っていく。



写真9 少し広めのプラトーに建っていた「山神宮」が刻字された石碑。右側面には「鑛口・・」の刻字、左側面には「昭和26 \Box ・・」の刻字。鉱山現地には神社、社、そしてこのような石碑が建立されている場合が多い。

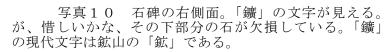






写真10 石碑から山側方向の先にあった「人為的」な掘り割りの跡。その先には潰れた(或いは潰した)坑口跡らしきものがあった。石碑と、この現地の様子、そして写真11に示している石英塊から、ここが「星教鉱山」跡であると判断した。が、少し不安でもある。周りにズリごときがあるので、枯れ草などをどけて、良好な標本を採集する必要があろう。

鉱物写真 東昭鉱山 無し。

星教鉱山



写真11 プラトー付近で見つけた石英塊。「金鉱石」なのかもしれ ない。未採集。

- 参考文献 (1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和48年(1973年)。」
- (2)「栃木県富井鉱山の鉱脈構造」、西原元男、鉱山地質、14巻、63号、11頁~21頁、1 964年。